

## 巻頭言

メディアセンター長  
立教大学理学部 教授 枝元 一之

メディアセンター長を拝命して4年たち、センター年報の巻頭言の執筆もこれが最後となった。「成り行き」という、クモの巣のようなこの世のしがらみに捉えられ、今回は否応なしに家内との馴れ初めの次第を書かざるを得なくなった。これまで3回の巻頭言で私は徹頭徹尾個人的なことばかり書いてきたが、今回はこれまでも増して極私的である。センター員の好奇心を満足させるのもセンター長の役目かと思うので、あえて書かせていただくが、「二人の馴れ初めの話を書く。」と家内に言ったら、「そんなことを書いたら、別れる。」と言われた。以下は、家庭の破滅を覚悟のうえで記すものである。もし読む方がおられれば、心して読まれたい。できれば、今回の年報は巻頭言のみブロックをかけ、メディアセンターの秘術を尽くして閲覧に複雑怪奇な手順、パスワードを課して、関係者以外閲覧不能にしていだけばうれしいのだが。

気儘な、というより放埒とも言うべき独身生活を謳歌していた私であるが、30代を迎えるにあたって身を固めることとなった。相手は、学部は違うが同じ大学出身の3年後輩である。このように書くと、どうせ電話ボックスからナンパしたんだろうと言われそうだが、彼女とは就職後知人の紹介で知り合った。初めて会ったときは、いささか驚いた。容貌が私の好みと奇跡的なほど一致し、いわゆるストライクゾーンのど真ん中（私好みのややアウトコースところもち低め）だったのである。したがって、初手から私は夢中になったわけだが、さて相手の私に対する初印象はいかがであったか。あまりキチンと聞いたことはないのだが、ある時「初めて会ったとき、僕をどう思った？」と聞いたら、「なんという腕の太い人かと思った。」と言っていたので、あまり感銘を与えることができなかつたことだけは確実である。彼女は、京都大学文学部で国文学を専攻し、讃岐典侍日記の研究で卒論を出し、卒業後は俳句の同人誌で同人を務めてきたという学究肌のインテリで、はっきり言ってかなりの変人である。おまえが言うかと言われそうだが、自分自身が典型的な理系の変人であることはおおいに認めるところであるが、彼女は私とは正反対のベクトルの異常性を持つ人である。就職直後の職場の研修旅行のとき、列車の窓から外を見て、傍らの同僚に「ねえ、見て。田んぼに、満々と、水がたたえられているわ。」と言ってうっとりとしていたので、同僚から不気味がられたという逸話が残っている。そこに惚れたわけだが。このような人であっても、女性として天性男の心を操る術を身に着けている。私の熱烈な求愛を、絶妙の間合いではぐらかし、はぐらかしては煽り、こちらの心を完璧に手玉に取って、交際における主導権を握っていた。結婚後も、力関係において完膚なきまでに主導権を握って現在に至っている。

私は、結婚までの交際で（あるいは結婚後も）数々の愚行を積み重ねてきたが、なんと

っても悔やまれるのが、プロポーズの仕方である。私は、当時勤めていた東工大の本館の屋上でプロポーズした。今から思うと、逆上せて頭脳の働きが変調をきたしていたとしか思えない。ここはロマンチックさのかけらもない所で、東京 23 区内でおそらく最も殺風景な場所である上に、階下の化学系の実験室からのドラフトの排気口が立ち並び、相当複雑な異臭さえ漂っていた。今、これを書きながらも腋の下に冷や汗が流れる思いである。あたりまえというか、当然ながらというべきか、このときプロポーズについては彼女はペンディングの裁定を下した。よく振られなかったものである。私は元来反省ということをしていない質で、その点猿にも劣るのであるが、このときだけは流石に反省した。しかし、いかに反省しても、人間の本質が短期間に変わるものではない。数カ月後にプロポーズのリターンマッチを行ったが、このときもホテルのロビーという芸のない場所で、おまけに「そろそろ結婚しましょか。」などという、無粋極まる告白であった。この男に気の利いたプロポーズを期待するのは時間の無駄だと思われたらしく、意外にもこれでお許しを頂いた。気質的には、これ以上はないほど正反対の 2 人であるが、逆向きのベクトルは打ち消し合うという自然界の摂理によるものか、本質的な波風はたたず、まずまず平穩に現在に至っている（この巻頭言をもし見られたら、あとの事態は保証の限りではない）。

この 4 年間、メディアセンターの業務の多様さに驚き続けた。私としては楽しい 4 年間であったが、さしたる仕事はせず飲み会だけは欠かさず喜んで参加するセンター長を暖かく迎え入れていただいて、皆様に感謝している。一度、有志と延々 5 時間以上飲んだことがあり、実に楽しい思い出となっている。メディアセンターの業務は、現在以降の大学の死生をにぎるライフラインである。今後、大学を取り巻く情報環境はさらに激変していくと思われるが、それを予測し、適切にキャッチアップしていかないと大学の未来はない。そのための機構改革が、様々に模索されていて、メディアセンターも今後発展的に再構成されていくと思われる。メディアセンターの責務は益々増大すると思われるが、なにより大事なものはライフワークバランスであろう。なにとぞ安定して快適な個人生活を基礎に据えられた上で、お仕事を頑張ってください。